

# 北海道・知床研修報告

## HH スノーウォーキングイベント

### 1. 知床国立公園の歴史とこれからの歩み

まず、ガイドさんから聞いた話では、知床は約 152 年前から整備が始まっていて、6 年前に開発が一段落したという説明だった。そこで強調されていたのは、短期の成果より長期の視点を優先するという考え方だ。いまの管理や意思決定は、数十年単位ではなく、200 年先の状態まで想像して組み立てる、という話だった。

土地利用の変化も大きなポイントだった。以前は耕地面積が多い時期があったが、現在は退耕還林、つまり耕作地を森に戻す方向に進んでいるという。耕地が減り、森林が連続して回復していくと、生き物の生息地が広がり、森の機能も戻りやすくなる。知床では、こうした「森に戻す」こと自体が、将来の自然環境を支える基盤として位置づけられていると感じた。

生物多様性の保全については、植樹の“やり方”を工夫する点が具体的だった。単に木を増やすのではなく、植樹の際に木と木の間隔をあえて確保し、つまり「ギャップ」を作ること、密にしすぎないようにする。そうすると日照条件や下草の状態に幅が出て、同じ場所の中でも多様な環境が生まれやすい。結果として、多様な生物が入りやすくなり、生物多様性の拡充につながる、という説明だった。つまり、目標は「森林面積」だけではなく、「森林の質」や「環境の多様さ」を育てることにある。

## 2. 知床国立公園でスノーウォーキング

知床自然センターからフレペの滝の遊歩道を歩いているとき、たくさんの白樺の木を見ることができた。ガイドさんが白樺の木を使って年輪について説明してくださり、年輪は一つで一年を表していることができた。実際に森の中でその話を聞いて、木の年齢がわかるというのはとても面白いと思う。また、木の幹にはキツツキがあけた穴も見ることができた。特に印象に残っているのは、一つの木に穴が二つあいていたことである。最初は別々の穴だと思ったが、ガイドさんに伺うと、この二つの穴は中でつながっていることがわかった。さらに、今回の観察を通して、森の中では木と鳥などの生き物が関わりながら生活していることを実際に感じることもできました。知床の自然の豊かさを体験できて、とても貴重な学びになりました。

## 3. 当地のステークホルダーとの交流

一方で、聞き取りでは、近年の課題としてシカの増えすぎが挙げられていた。シカの個体数が多すぎると、下草や若木が食べられ、森林の更新が進みにくくなり、生態系に影響が出る。そこで現在は狩猟・捕獲によって個体数をコントロールし始めているという。知床の管理は「放置して自然に任せる」だけでなく、自然のバランスが崩れるリスクが見える場合には、人が介入して調整することも選択肢に入れている。



Figure1 ガイドさんからの紹介



Figure2 エゾシカの捕獲方法

捕獲後のシカの扱いも特徴的だった。基本は地産地消で、シカのうち価値が高い部分の20～30%程度は食用にされたり、加工して製品化されたりする。一方、残りはペットフードとして利用される。つまり、個体数調整を“ただ減らす”で終わらせず、地域で資源として活用し、無駄を減らす仕組みも同時に作っている。本州のシカに比べて一回り大きく、雄の成体は150kgを超えることが分かった。運転した時に、多くのエゾシカも見た。



Figure3 エゾシカの利活用

- 講義を聞いたら、エゾシカは季節で変わる色という点
  - 夏： 鮮やかな茶色に白い斑点（鹿の子模様）。森の緑に溶け込む美しい姿。
  - 冬： 寒さに耐えるための厚い灰褐色の毛。厳しい冬を生き抜く強さを感じさせる。
  - 立派な角： 雄の角は4月頃に一度落ち、すぐに新しい角（袋角）が生え始めます。
- 秋の繁殖期に向けて硬く鋭(すど)くなっていくそのプロセスは、生命のサイクルそ

のものである。

そして食事いうと、とりあえず美味しかった。特に料理長の肉を料理過程を見ると、外腿と内腿を分けたり、肉の味を説明したり、楽しみだった。

その他、環境省に対して質問したら、何らか自分としての観光者じゃなくて地元住民の考えや生活体験や長時期のヒグマに対しての感情をわかる。今回の研修旅行旅行を通して、環境に関する多くの貴重な知識を得ることができた。また、さまざまなステークホルダーが生態系保全や環境保護の中でそれぞれどのような役割を果たしているのについて、より立体的で明確な理解を深めることができ、学生として、貴重な経験だと思う。

#### 4. 今後の展望

今回の研修を通して、いくつかの重要な課題が見えてきた。

まず、日本は食料自給率が低い国であるにもかかわらず、知床では退耕還林が進められている点は非常に興味深い。このような政策がどのような背景や判断に基づいて行われたのかについては、今後さらに分析する必要がある。

また、野生動物の活動と人間の観光の安全確保はトレードオフの関係にあり、そのバランスは固定的なものではなく、状況に応じて継続的に調整していく必要がある。以上より、知床の環境管理は長期的な視点と現実的な課題対応の両立が重要であると考えられる。

#### 5. おわりに

今回の研修旅行では、我々が知床地域に訪れ、当地の様々なステークホルダーと交

流し、普段体験ではなかなか体験できない活動を経験した。

その中で、知床における環境管理は、長期的な視点に基づいた森林再生や生物多様性の保全を重視していること、そしてエゾシカの個体数増加のような現実的な課題に対しては、人の介入を通じて調整が行われていることが明らかになった。

本レポートでは、これらの取り組みと課題を整理し、知床における環境保全の特徴を明らかにした。今回の経験は、環境問題を単なる理論ではなく、現場での実践として理解する上で非常に有意義であった。